

諸宗教間対話（その１）－ユダヤ教とキリスト教

塩谷 惇子

Inter-religious Dialogues (1) —Jewish / Christian Thoughts

Junko Shioya

This is a preliminary study and reports on dialogue between Jews and Christians. It took place in February 1994, as “The International Jewish/Christian Conference on Modern Social and Scientific Challenges” in Jerusalem. The main theme was “Religious Leadership in Secular Society.” It was a great event for both religions after historical establishment of diplomatic relations between Israel and Vatican at the end of 1993. The major speakers were renowned and vigorous leaders from various denominations of Jews and Christians. Over 500 participants came together from the four corners of the world to listen, learn and discuss the major scientific and social challenges of our times that we face, and which demand moral address and guidance. As one of participants I learned a lot and want to share this experience with Japanese people who are interested in inter-religious dialogues.

In this paper I introduce two distinct thoughts on “Jewish and Christians — Facing the modern world.” The one is from Catholic side, Cardinal Ratzinger (President of the Congregation for the Doctrine of the Faith) and the other from Jewish side, Rabbi Professor Irving Greenberg (President of the Center for Jewish Learning and Leadership, USA). In the middle, I introduce one of the opening remarks by Cardinal Carlo Martini (Archbishop of Milan and former president of the European Conference of Catholic Bishops) to think about the “modern world” and “religious leadership.”

To begin inter-religious dialogues, it is very important to listen to and learn from the other to take right position in own attitudes and thoughts.
(To be continued)

キリスト教は世界平和に貢献できるのだろうか。宗教そのものに問題はないかという問いが、アウシュヴィッツを経験したヨーロッパのキリスト教徒にとって深刻な問題であることをイスラエルに滞在中私は感じ取った。現在、世界平和の大きな焦点の一つである中東の政治状況をみると、10年前には、ユダヤ教とキリスト教の歩み寄りが積極的に行われていたかのように見えたことが、やはり表面上の動きにすぎなかったのかと思わざるを得ない。1993年9月にはノルウエーを仲介としてイスラエル・パレスチナ和平交渉が成立した。その年の12月末には歴史上はじめてイスラエルとバチカンとの間に国交が回復した。その頃、私は研究休暇でエルサレムのラティスボン・ユダヤ教研究所に滞在していた。翌1994年2月の初め、エルサレムで「現代社会と科学技術の挑戦に直面するユダヤ教徒とキリスト教徒の国際大会－世俗社会における宗教的リーダーシップ」（The

International Jewish/ Christian Conference on Modern Social and Scientific Challenges—Religious Leadership in Secular Society) が開催された。この大会には世界96カ国から約500名が集まったが、私は傍聴人としての参加がゆるされ、そこでユダヤ教各派、キリスト教各派のリーダーの話に接することにより、諸宗教間対話の必要性を痛感した。

一、『カトリック教会のカテキズム』にみるユダヤ教とキリスト教 および諸宗教との関係 (Joseph Ratzinger枢機卿)

「ユダヤ教とキリスト教の関係は長い間、血と涙の歴史であり、相互不信と敵意に彩られていたが、神の恵みにより、相互の赦しと理解と受容をあらわす時もあったことを忘れてはならない。アウシュヴィッツ以後、キリスト教にとってユダヤ人との和解は急務である。アウシュヴィッツに代表されるホロコーストの出来事はユダヤ人抹殺を目論みただけではなく、キリスト教からユダヤ教の遺産を根こそぎにしようとさえするユダヤ文化への憎しみでもあった。ユダヤ教とキリスト教は唯一の神への信仰と神のみこころへの献身という価値を共有するのに、このようにひどい対立関係に陥っていった理由は何か？この敵意はキリスト教信仰の中にある何かから発生したのだろうか？和解に達するためにはキリスト教の核心から何かを除去しなければならないのか？ナザレのイエスを生ける神の子であると信仰告白し、人類の贖いとして十字架の出来事を信じることは、含蓄的に神の子の死についてユダヤ人を断罪し、咎めることになるのか？キリスト教信仰の核心にはキリスト教徒を不寛容にし、ユダヤ人に敵意を抱かせるものがあるのか？ユダヤ人が自己とその歴史の尊厳を確立するために、キリスト教徒は自分の信仰を放棄しなければならないのか？両者の争いは宗教そのものから生まれるのであり、これを克服するためには宗教を捨てることが求められるのか？」

以上は上記の大会に招かれたバチカン教理聖省長官であるラッチンガー枢機卿の問題提起である。本稿の第一章ではこの問いに対して、1992年にバチカンで発行された『カトリック教会のカテキズム』¹にそって回答を試みた同枢機卿の考え方を紹介し、ユダヤ教とキリスト教の対話の方向を考察していきたい。同教理書はようやく本年（2002年）7月になって翻訳が出されたが、本稿では英語版から筆者が翻訳したものを引用する。本章中の（ ）内の数字はこの教理書の箇所を示す。また本書を以下「カテキズム」と略称する。

ラッチンガーはまず、この問題は単なる学問的な諸宗教間対話の域を越え、今という歴史的時点における根本的決断を迫るものであると前置きして、ユダヤ人とキリスト教徒の

問題を和らげるために、イエスが原理的には何もユダヤ教の伝統を越えることはなかったユダヤ人教師であったと以下のような論旨で主張されていると述べる。イエスの死はユダヤ人とローマ人の間にあった政治的緊張の結果であり、彼はローマの権威筋によって政治的反逆者として処刑された。イエスが神の子とされたのは、その後のヘレニズム的雰囲気の中で起こったことであり、そのとき同時に、時の政治情勢から十字架刑の責任がローマ人からユダヤ人に移されたのだ、と。しかし、このような解釈はもっと正確にテキストを読ませる刺激として役立つことはあっても、歴史的資料にもとづくイエスを語ることなく、教会のキリストへの歴史的信仰を神話と結び合わせて、新しい別のイエス像を作り上げています。このような解釈によって描かれるキリスト像は、ギリシア的宗教性とローマ帝国の政治的日和見主義の産物であり、ここで取り上げようとしている問題の重要性に対して何の解答にもならない。したがって、彼はキリスト教のイエス像について個人の学説を述べるのではなく、1992年の「カテキズム」がこの問題にどのような光をあてているかを検討し、紹介する。

1) 東方の博士たちの物語（マタイ 2：1－12）に見られるユダヤ人と異邦人

東方からイエスを拝みにくる博士たちの物語は、異邦人から成り立つ教会の起源を示している。カテキズムはこの物語に関して以下のように記す。「博士たちがユダヤ人の王を拝むためにエルサレムにやってきたことは、彼らが「ダビデの星のメシアとしての輝き」²に導かれて、イスラエルの中に、諸国の王となる方を探しに来たことを示しています。彼らの来訪は、異邦人がユダヤ人の方に目を向け、ユダヤ人から聖書の中に含まれている救いの約束を受けることによってはじめてイエスを発見し、イエスを神の子、世の救い主として礼拝することができたことを示しています。ご公現（エピファニア）³は諸国民が（アブラハムらの）族長の家族に加わり、イスラエルの遺産を受けるにふさわしい者となったことを現します」（528）。

カテキズムは、この物語の中に、ユダヤ人と諸民族がイエスによって結び合わされ、同時にイエスの使命が最初に啓示されたことの意味を読みこんでいる。イエスの使命はユダヤ人と異邦人（ユダヤ人以外のすべての民族）を一つの「神の民」⁴として結合させ、諸民族がイスラエルの神を礼拝するという聖書の普遍的約束を実現させることにある。マタイ 2 章の物語は「第三イザヤ」⁵に描かれている諸民族のシオンへの巡礼を、諸民族に対する使者の使命を宣言するものとして読ませものである。「わたしの名声もわたしの栄光もみたことのない遠い島々に、彼らはわたしの栄光を伝える・・・わたしは彼らのうちからも祭司とレビ人を立てる、と主は言われる」（イザヤ 66：19－21）。したがってマタイによれば、諸民族の宗教は人間の道を照らす星であり、その星はエルサレムを指し示す。その光は一旦、消え失せるが、イスラエル人の聖書である神のことばの中で新たな輝

きを放つ。その星はヤコブから現れ出るというバラアムの預言（民数記24：17）⁶と関連するものであり、カテキズムはさらに創世記49：10⁷を引用して、イエスをユダヤ人と諸民族を結ぶ仲介者であるという結論を導きだす。

世界史におけるイエスの使命は、諸民族の歴史をアブラハムの歴史、すなわちイスラエルの歴史の中に招き入れることである。その使命は、世界諸民族の一致と和解である。そのことをパウロは『エフェゾの教会への手紙』に以下のように記している。「このキリストによってわたしたち両方のものが一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。したがって、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエスご自身であり、」（2：18－20）。イエスを通してイスラエルの歴史は全人類の歴史となり、アブラハムに約束された祝福が実現する。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。・・・地上のすべての氏族はあなたによって祝福に入る」（創世記12：2－3）。諸民族はイスラエルの特殊な使命を無にすることなく、選民イスラエルの兄弟となり、神の約束の受け手となって、神のみこころに従うものとなる。

同じテーマを『ヨハネ福音書』は「救いはユダヤ人から来る」（4：22）ということばで表す。このテキストもイエスの使命がイスラエルと諸国民を結合することにあると述べるが、イエスの使命を人類と神との和解というダイナミズムの中に置いて考えなければ、理解することが困難であろう。

2) イエスと律法：「わたしは律法を廃止するためではなく、完成するためにきた」

歴史的イエスのイメージは、彼のメッセージと働きに呼応しているだろうか？『カテキズム』は、イエスのメッセージを「神の国」のモットーで要約し（541－560）、その後、イエスとイスラエルの関係を以下の3つの観点から取り上げる。「イエスと律法」（577－582）、「イエスと神殿」（583－586）、「唯一の神である救い主についてのイエスとイスラエルの信仰」（587－591）。最後にイエスの死と復活をイスラエルの過ぎ越しの秘儀の完成としてその神学的意味を考察する。

律法、神殿、唯一の神というテーマはユダヤ教とキリスト教の議論を白熱させる材料であり、信仰をもって歴史への忠実さを貫くならば、両者を和解させる方向にも導くことができよう。しかし実際には、ファリサイ派・祭司・ユダヤ人に対して否定的イメージを与えた歴史的イエスについての初期解釈を生み出したばかりでなく、ファリサイ派や祭司を頭の硬い律法主義者として描き出す現代の自由主義者の思想を生み出すテーマともなった。イエスは祭司らの権威と闘い、国家の法律や伝統に逆らう反抗者・革命家として浮き彫りにされた。イエスの試みは失敗して、敗残者となるが、まさにこの敗北によって決定

的勝利への第一歩へ踏み出されたという解釈が横行している。ラッチンガーはイエスの死についてのこのような解釈は、彼のメッセージが和解にあることを見えなくさせていると批判する。

『カテキズム』はこうした見方はとらず、イエスの中にメシアを認め、イエスを天の国における偉大な者とする最も『マタイ福音書』のイエス像を継承する。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと、思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人々に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」（マタイ 5：17-20）。『カテキズム』はイエスの特別な使命が律法への忠実にあり、イエスは正義をもたらす「神のしもべ」（イザヤ 42：3）であり、イエスがそれによって「民への契約」（イザヤ 42：6）となられたことを明らかにする。

律法遵守の真意に関して『カテキズム』は以下に引用する重要な発言をしている。「律法を文字通りに遵守することだけではなく、霊においても純粋に守るという原則は、ファリサイ派の人々にとって大切なことでした。彼らはこの原則をイスラエルにもたらすことによってイエス時代の多くのユダヤ人を熱心な宗教的情熱へと導きました。もし、この情熱が偽善的な論議に陥らなかったとすれば、すべての罪人に代わってただ一人の義人が律法を完全に成就することを通して行われる前代未聞な神の介入を、神の民（イスラエル）に受け入れさせる準備ができたはずでした」（579）。律法を完全に成就するということは、「律法の呪い」を自分の身に引き受けることをも意味する。なぜなら律法を文字通り遵守することは重荷であり、よほど時間と余裕のある人にしかできないものとなっていたからである。しかしイスラエルの信仰によれば「律法の言葉を守り行わない者は呪われる」（申命記 27：26）。律法を守れないガリラヤの民は罪人、すなわち呪われた者であった。本来、律法は人々が神を知り、神を中心とした生活を形成する助けとして与えられたものであり、いわば教育者のような役割をもつものであった。しかし律法が人を救うのではなく、救いは神への愛に動かされた信仰による。イエスはユダヤ人として、律法に縛られてきた人々と内的に深いつながりをもちながら、律法に従い、律法の呪いを身に受ける死を通してイスラエルを律法の呪いから解放したのであった。パウロはイエスの十字架上の死を以下の短い文で神学的説明をする。「キリストはわたしたちのために呪いになって、わたしたちを律法の呪いから贖いだしてくださいました。『木にかけられた者は

皆呪われている』（申命記21：23）と書いてあるからです」（ガラテヤ3：13）。『ヤコブの手紙』にも律法遵守に関して次のように書かれている。「人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違反者と断定されます。律法全体を守ったとしても、一つの点において落ち度があるなら、すべての点について有罪となるからです」（2：9－10）。厳しい律法遵守を補うために、ユダヤ人は年に一度、律法違反の罪の赦しを神に願う「贖いの日」（ヨム・キプール）を設け、重要な祭日としている。『カテキズム』はユダヤ人の大きな祭日「ヨム・キプール」を、贖罪としてのキリストの死と結びつける（433, 578）。

多くの掟の中でどれが一番重要か、という問いをある律法学者がイエスにする。その問答は三つの共観福音書に載せられているが、マルコ福音書にはこう記されている。「一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。『あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか』。イエスはお答えになった。『第一の掟は、これである』。“イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい”（申命記6：4－5）。第二の掟は、これである。“隣人を自分のように愛しなさい”（レビ19：18）。この二つにまさる掟はほかにない。」（12：28－31）。『カテキズム』は、マルコが唯一の神に従うユダヤ教の信仰宣言定式である「シェマー・イスラエル」にイエスが神への愛と隣人愛を結合していることを指摘する。人間の道は神に向けられ、神の基準によって測られるものであるが、同時にそれは自己愛と隣人愛にも具体化される。それが創造主の意志である。

ラッチンガーはついで、現代のユダヤ教徒とキリスト教徒が現代世界に対して歴史的・神学的議論を越えて責任が問われていることを強調する。両者が現代世界に対して共に表現できること、またしなければならないのは、天地を創造された唯一の神の証人となることであり、その神のみこころの真実さを伝達することである。神の掟は自然界を通しても語られ、ユダヤ教徒もキリスト教徒も会堂や教会で唱和する「詩篇19」の祈りを唱える。

「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。／ 話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう。／ 主の律法は完全で、魂を生き返らせ、主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。／ 主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え、主の戒めは清らかで、目に光を与える。／ あなたのしもべはそれらのことを熟慮し、それらを守って大きな報いを受けます。／ 知らずに犯した過ち、隠れた罪から、どうかわたしを清めてください。／ あなたのしもべを驕りから

引き離し、支配されないようにしてください。そうすれば、重い背きの罪から清められ、わたしは完全になるでしょう。／　どうか、わたしの口の言葉がみ旨にかなひ、心の思いが御前に置かれますように。主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ」（詩19：2，4，8，9，12－15）。

3) 律法についてのイエスの解釈：葛藤と和解

律法と福音の内的連関性について、『カテキズム』は聖アウグスティヌスと聖トマスの伝統に従って説明する。律法とイエスの福音は弁証法的に取り上げられるものではなく、むしろ類比（アナログア）や「予型」（テュポス）として解釈される。「旧約の体制下においても、聖霊の愛と恵みに生かされ、新約においてあらわれるような霊的で永遠の約束を何よりも求めている人々がいました。それと反対に新約時代に入ってからでも肉の思いに生きている人々がいます」（1964）。

律法は預言的に、神の約束という内的なダイナミズムにそって読まれるべきものであるが、預言的ダイナミズムによる律法の読み方は『カテキズム』の中に、二重の形式で現されている。一つには律法は本来的に心の刷新をさせる力であり、常に新しくされる心をもって読まれるべきものであり（1968参照）、そのように読むことによって人は律法の儀礼的・法的遵守から解放されるという（1972参照）という観点である。しかし、このような読み方が実際にできたのか？　またこのように言うことは、律法の一点一画もすたれることがない、という言明とどのように両立するのか？　イスラエルの律法は一方では、理性的で普遍的な純粋に倫理的なものであるが、他方では時代に制約された儀礼律法である。また律法の核である十戒（十のことば）は、神への礼拝が倫理・道徳から分離することができないことを十分に示しているのだが。

我々はここでパラドックスに直面するとラッチンガーは言う。イスラエルの信仰は普遍的なものに向けられていた。すべての人々にとっての唯一の神を信じるのであるから、その信仰はそれ自体、全諸民族の信仰となるべきものを内包している。しかし律法は非常に具体的にイスラエルとその歴史に向けられた特殊なものである。それはそのまま普遍化できるものではない。このパラドックスの交差するところにナザレのイエスは立っている。イエスはユダヤ人としてイスラエル律法の下に生きていたが、同時に自分が神の普遍性の仲介者であることを知っていた。この仲介は政治的計算や哲学的解釈に置き換えることはできない。政治的計算も哲学的解釈も自分自身を神のことばの上において、自分の基準によって神のことばを書き換えるものだからである。イエスはリベラルな改革者として行動し、自分を律法のよりよい解釈者として現し、自己宣伝するようなことはされなかった。当時のユダヤ人権威者とイエスのやりとりの中に、我々はリベラルな改革者と硬直した伝

統主義者との対決を見ることはしない。このような見方は、今日では一般的になっているが、根本的に新約の葛藤を誤解するものであり、イエスに対してもイスラエルに対しても正当な見方ではない。むしろイエスは律法を〈神・学的〉に意識し、人の子としてふるまいながら、神の権威をもって、最も深いところで、父なる神と一致することを自分自身に求めたのである。神だけが根本的に律法を再解釈することができ、律法の広い意味での変容と維持が実際に意味するところを表すことができる。イエスの律法解釈は、それが神の解釈と一致するかぎりにおいて意味をもつ。イエスと当時のユダヤ教権威者との論争は、あれこれ特定の律法違反についてではなく、イエスが「わたしと父は一つである」（ヨハネ10：30）と権威をもって発言された、イエス自身の神的権威による要求と行動の問題であった。

この点を理解してはじめて葛藤の深みにある悲劇を見ることができるとラッチンガーは言う。イエスは律法を拡大したのであるが、リベラルな革命家としてではなく、律法に忠実な者、厳密に律法を満たす者としてこれを解放しようと望んだ。その望みと実行は父と一体であるイエスの本質から出たものであり、父なる神においてのみ律法と約束は一つであり、この神においてのみイスラエルは諸民族の祝福と救いになり得たのであった。イスラエルはイエスの律法に対する具体的行為の中に、個々の掟を傷つけることとは別の次元を見抜かねばならなかった。つまり、啓示と信仰の核心にある基本的な従順を傷つけるという問題である。「聞け、イスラエル、あなたの神は唯一の神である」。ここに「従順」（遵守）と「従順」が衝突し、十字架に終わらなければならなかった葛藤が生じたのだ。ここには根本的な視点の違いが見られる。ラッチンガーはそれを詳細には語らないが、ユダヤ人のある一部の人々とキリスト教徒の律法解釈の違いが問題となっている。

『カテキズム』の中には、イエスの十字架は實際上、避けることのできなかった出来事であったとか、イスラエルの罪として永遠に負わされた汚点であるという考えはみられない⁸。新約聖書には、十字架は一方では、ある人々を断罪し、他方では、ある人々を救うものであるという考えはない。つまりイエスを十字架につけたユダヤ人を断罪し、十字架によって異邦人が救われるというように、十字架の効果をこのように相反する二重のものとみなす思想はない。十字架は人類の救いと和解という一つの決定的効果をもたらすものである。キリスト教徒のもつ希望はアブラハムが抱いた希望の延長線上にあるもので、イスラエルの犠牲とつながっている。カテキズムは自分の一人息子を捧げるアブラハムの犠牲が多く国民の祝福の源になったことを想起する。「キリスト教徒の希望の起源と原型はアブラハムが抱いた希望のうちにあります。アブラハムはイサクにおいて実現する神の約束によって豊かに祝福を受けましたが、イサクを犠牲にする試練によって浄化されました」（1819）。

新約聖書はキリストの死をアブラハムとの類比（アナロギア）から理解する。旧約聖書に表れる礼拝規定はすべてイエスの死の中に取り上げられ、イエスの死によって最も深い意味がもたらされる。あらゆる犠牲は一つの根本的な行為の表象行為である。真の、すべての人を代表する者の偉大な行為を通して、あらゆる犠牲は表象から現実へと変えられる。そのためにいままで表象であったものはその一点一画も失われることがない。新約聖書が理解するように、イエスによって律法が普遍化されるということは、神が啓示された律法という生きた全体からいくつかの普遍的な道徳的掟を抽出することではない。律法は礼拝と倫理（エートス）の一致を守る。倫理は礼拝の基盤としてとどまり、すべての礼拝はイエスの十字架に結ばれるとき、初めて完全に現実的な礼拝となる。キリスト教信仰によれば、十字架上でイエスは律法全体を解放し、成就して、これを異邦人が全体として受け入れることができるようにされた。それによって彼らはアブラハムの子らとなるのである。

4) 十字架

問題の核心に近づいた。ラッチンガーはユダヤ人と異邦人の十字架に対する歴史的・神学的責任の問題はここから理解していくべきであると言う。

まず裁判と処刑のプロセスに関する歴史的問題であるが、この問題を扱う『カテキズム』の章の小見出しは一つの方向を示している。「イエスに関するユダヤ人権威者たちのさまざまな考え」（595－596）、「ユダヤ人全体がイエスの死に責任をもつのではない」（597）。

『ヨハネ福音書』はユダヤ人の主だった人々の中にはイエスに従う者がいたことを記す。「議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかって公に言い表さなかった」（12：42）。『使徒言行録』は聖霊降臨（ペンテコステ）の後には「弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った」と記している（6：7）。同じく、ヤコブと長老たちもパウロに次のように報告する。「兄弟よ、ご存知のように、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています」（使徒21：20）。以上からもイエスの裁判がユダヤ人の罪に帰せられるということは新約聖書の主張ではないことがわかる。第二バチカン公会議も以下のように宣言している。「キリストの受難に際して犯されたことの責任を、その当時のユダヤ人すべてに無責任に負わせたり、今日のユダヤ人に負わせることはできません。・・・ユダヤ人は神から排斥された者とか、呪われた者とか、あたかも聖書から結論されるかのように言うてはなりません」（第二バチカン公会議『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』NA4）。

以上のような歴史的分析は重要であるが、まだ問題の核心には触れていない。新約聖書

の信仰によれば、イエスの死は単に外的な歴史的事実ではなく、むしろ神学的出来事だからである。『カテキズム』における十字架の死についての神学的分析の最初の小見出しは、「イエスは神の計画に従って渡された」（599－600）であり、こう書かれている。

「イエスの非業の死は、さまざまな事情が不幸に絡み合った偶然の結果ではありません。それは神の計画の神秘に属します」（599）。これに対応するもう一つの説明は「キリストの受難の責任はすべての罪人にある」（598）という小見出しに表され、「教会は、わたしたちの罪がキリストご自身を傷つけるという事実を念頭において、ためらうことなく、イエスの死に対するもっとも重い責任はキリスト信者にあると考えています。それにもかかわらず、キリスト信者はその責任をあまりにもしばしばユダヤ人に押し付けてきました」（598）と言明する。十字架は神の愛を否定する人間の罪の業である。イエスを十字架につけた責任は人間の罪であるが、しかし他方で、十字架は神の力強い愛によって罪を克服する救いとなった。イエスの血は、この世界で不正によって流された（アベルの血によって代表される）すべての血よりも多くを語る。その血は罰を求める血ではなく、贖いと和解を求める血である。

結論としてラッチンガーは以下のようにユダヤ教とキリスト教の歩み寄りの願望を要約する。ユダヤ教徒とキリスト教徒は共通の遺産を認め、相互に深い内的な和解のうちに受け入れあうべきである。和解はそれぞれの信仰を軽視し、あるいは否定することによってではなく、信仰そのものの最も深いところから生じる態度である。両者が相互に和解しあうことは、世界の中の平和、また世界のための平和の力となる。唯一の神の証人として、神への愛と隣人への愛の一致から離れては、礼拝を行うことはできない。ユダヤ教徒もキリスト教徒もこの神のために世界に向けて扉を開き、神のみ旨が天においても地においても行われ、神の国が来るように願おう。

以上のラッチンガーの神学的講演による呼びかけは、あらためて、イエスは誰なのか、について聖書と歴史をさらに深く学ぶ必要性を促してくれた。21世紀を迎えてキリスト教はマイノリティーとなっている。アジアやアフリカではこのような聖書神学をそれぞれの宗教的伝統をふまえてどのように理解していくべきか大きな課題を覚え、今日にいたっている。ヨーロッパにおいては何百万人というユダヤ人のいわれなき犠牲の責任をキリスト教徒がどのように受け止め、対応していくかの問題はまだ終わっていない。したがって単なる学問上の宗教間対話に何かが加わらなければならないのだ。

ヨーロッパのキリスト教神学の発想や用語に親しんではいるが、日本人である筆者にとって、実はこの『バチカン・カテキズム』によるラッチンガーの論理は理解の助けには

なるのだが、ずっと心や腹の底におちていくようには感じない。同じキリスト者であっても、信仰内容の理解に関して、また表現に関して、西洋人と東洋人の間では対話が必要であることを実感する。最初の「博士たちの物語」で彼らがメシア「ダビデの星のメシアとしての輝きに導かれて」とある箇所、聖書的背景を知らない日本人には長い聖書の説明が必要とされる。それでは知識人や勉強した人でなければ真の信仰に導かれないのだろうか？ この問いを投げかけて思い出すのはイエス・キリストの次の言葉である。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした」（マタイ11：25-26、ルカ10：21）。特に、ルカはこのことをイエスは「聖霊によって喜びにあふれて言われた」とコメントしている。宗教的知恵は学者の占有物ではない。むしろ、学者も無知と言われる庶民やこどもから学ぶことが必要である。日本のカトリック修道士で諸宗教間対話を長年かさねている奥村一郎師の本の中に、幼子から学んだ知恵がいくつも書かれている。その一つに以下のようなものがある。

その章の題は「おほしさんが ひとつでた」。「おほしさんが／ ひとつでた／ おとちゃんが／ かえってくるで」 この詩はまだ文字を知らない子どもの口から出たことばをそのまま書きとめた口頭詩である。奥村師はつぎのようにコメントしている。「たぶん、宵の明星を見たのだろう。そのとき、薄暗くなった夕暮れの西空に光り輝く美しい金星を見た小さい坊やの心に映ったものは、家路を急ぐパパの姿。一つの星と一人のパパ。一つと一人でなくてはならない」。「幼児のみずみずしい体には、大自然の血がそのまま通っているのだろうか。大宇宙と小宇宙とが、そこでは一体になっているのだろう。そこに見る天地創造の太古にも遡る幼子の世界をいつもうらやましく思う」。「二千年の昔、幼いイエスのもとに学者を導いた東方の星。神のはからは今も、いつも変わらないのだろう。『嬰兒復帰』とは、さらに西暦前に遡る中国の古典『老子』の教えでもある（第28章）」⁹。一つの星に、一人のパパを見た幼子と同じ眼を、東方の博士たちももっていたにちがいない。一つの星の輝きに、生まれようとしているメシアの輝きを見たのだから。聖霊はこのような洞察を学者にも、無知なこどもにも与え、一人の美しい、いのちにあふれた、偉大な神へと人類の心を導き続けている。

二、現代世界に対するユダヤ教とキリスト教指導者の課題を共に考察するにあたって（Carlo Martini枢機卿）

前述の講演に先立つ、開会挨拶者の一人として、もう一人のカトリックの代表であるマルティーニ枢機卿は、諸宗教間対話の前提となる要点に関して示唆に富む挨拶をされた。マルティーニ枢機卿は当時、世界でも最大の司教区であるミラノ大司教であり、それ以

前は世界の聖書学者の第一人者として活躍されていた。

はじめに、大会テーマのキーワードである「現代社会」と「宗教的リーダーシップ」について、考えを述べる。「現代社会」は歴史上の他の時代よりも悪いのか、今日における我々の仕事は以前より困難なのか。それは難しい質問で、直接答えるつもりはないが、福音書が書かれた時代も決して肯定的な社会ではなかった。イエスは同時代について、また弟子たちについて言われた。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまであなたがたに我慢しなければならないのか」(マタイ17:17)。これを聞くと、現代が最も悪い時代とは言えなくなる。物事が今より悪く進んでいた時代もあったのではないか。我々以前の宗教的指導者、信仰の父祖たちも困難な時を経験し、それを克服して来たに違いない。「宗教的リーダーシップ」ということは、望ましいよいものなのか？ 英語圏でよい意味で用いられる“religious leadership”という用語は、他の環境ではそれほど肯定されるものではない。宗教的権威が個々の信仰共同体の価値を無視して、政治・経済的発展のプログラムと同様なかたちで、魂の領域を支配してきたことを思い起こさせるからである。『ルカによる福音書』にはこう書かれている。「使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論が起こった。そこでイエスは言われた。『異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい』」(22:24-26)。この「権力者」は“Gracious Lord”、今日の用語にすれば“Great Leader”である。イエスの言葉に従って「宗教的リーダー」という表現を用いるならば、その人は「信仰共同体の謙遜なつつましい奉仕者」である。

以上の前置きの後に、マルティーニ枢機卿は自分自身が「宗教的リーダー」としてどのような問題に日々直面しているか、そしてそれに対してどのような態度が必要かについて、個人的経験から考えを述べる。彼は問題を、内輪の¹⁰、世界の¹¹、そして精神的・霊的問題¹²という3つのタイプに分ける。

1) 内輪の諸問題

毎日直面するのは自分が属し、責任をもつ宗教共同体内部の諸問題である。たとえば、召命が少ない、奉仕者として訓練された人がいない、協力者の個人的困難などの人事問題、諸問題の中での優先課題、行政・財政問題、おなじ宗派の中での異なるグループ間の緊張の問題、真の発展と偽りの発展の区別、真の発展に対する抵抗などなど。

これらの諸問題に関して、マルティーニ枢機卿は、重要なことはこうした問題を克服す

る方法ではない、と言う。各人が神からのインスピレーション、あるいは常識、法規や伝統にしたがって自分自身で解決の道をみつけなければならないからである。宗教的リーダーとしての自分にとって今、重要なことは、自分にとってだけでなく、他の宗教的リーダーにとっても価値があるとみなされる一般原則を肯定することである。ということは、こうした問題をかかえながら生きることであり、次に述べる第二、第三のタイプの問題をかかえる余地を残すことである。換言すれば、内部の問題について責任を持ちながらも、内的に心の自由をたもち、一層大きな問題に耳を傾けることができるようにすること。

2) 世界の諸問題：全人類に共通の大きな問題

戦争、平和、諸民族・グループ間の闘争、暴力、人間生命の保護、堕胎、病気、飢餓、人口移動、環境の諸問題。さらに民族間、国家間の規制、秩序、緊張、南北問題、貧富の問題。生命の始まりと終わりに関する倫理問題、生命倫理、技術と倫理の緊張、経済倫理などなど。これらの問題について、毎日のように意見が求められる。マルティーニはこれらの問題は聖書の時代と同じように古くからの問題であり、二つの態度が重要であると言う。一つは、神の啓示の中には健全な行動のための原理と言葉があると信じる信仰者として問題を受けとめること。またこうした問題を理解と愛情をもって見つめ、技術者や政治家やその他の世俗的指導者によって扱われている問題に人間らしい顔を向けることである。宗教的リーダーは常に、公けに議論されていることの中に倫理的、道徳的次元を、そして信仰の次元をもたなければならない。

そのためには、聖書を読み、沈黙のうちに個人的に祈り、黙想する時間を確保する絶えざる努力が必要である。宗教的リーダーが現代の諸問題に関して語ることができるのは、深い内的な宗教体験から言葉が湧き出るときだけである。

3) 精神的・霊的問題

これは宗教者にとっての中心的問題である。神、救い、祈り、礼拝、信仰、希望、赦し、死後の生命、正義、愛などなど。世俗社会はこのような問題に歓心がないように見える。多くの人は宗教者に第二のタイプの倫理的問題について訊ねる。真に宗教的な人々だけが我々からこのような精神的・霊的問題を聞こうとする。我々はこのようなテーマについて世俗的な人々には語らず、ただ信仰をもつ内輪の人々だけに語るべきなのかどうかという問題に直面している。もちろん世界のさまざまな場所において、またさまざまな宗教において状況は非常に異なるであろう。わたしは自分自身のこの問いに対する回答を押し付けるつもりはない。マルティーニは、すべての人がこのような精神的・霊的問題の前に身をおく必要があると確信していると述べる。たとえある世俗社会がこのような問題から身を引いているとしても、それは人間の本質に属する問題である。

しかしマルティーニ枢機卿にとって最も重要なことは、これらの問題に対して今日の宗教的リーダーがもつ内的な態度について問うことであると言われる。そして二つの点をあげる。第一に、誰にとってもこれらの問題（神、救い、祈り、希望、愛など）は我々の真の、中心的問題であることが明白でなければならない。第一、第二も問題に対処しなければならないのは、何にもまして、我々がこの問題に深く関わっているからこそである。これらの問いは人生の、人類の一番根本的な問いであり、その他の諸問題は究極的にここにかかっているということをしっかり押さえていなければならない。

最後に、現代の宗教的リーダーにとって非常に大切な勧めを4つ挙げて、講演を締めくくる。

第一に、神との深い内的交わりと堅固な祈りの心。持たされる責任が大きくなるにつれて、祈りと沈黙に献身する時間も多くなる必要がある。

第二に、大きな内的平和を保つこと。フィリピの教会にパウロが書いたことばのように。

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」（フィリピ4：6－7）。

第三に、現代に対して大きな希望をもつこと。現代は不満や失望が絶えない時代である。しかし我々はこれに希望と喜びをもたらすべきである。

第四に、ユーモアをもつこと。希望と信仰から生まれるリラックスした態度をもつ。我々はみな神のよき手のうちにあり、この大会も神の手のうちにある。よき成功を祈ろう。

三、ユダヤ教徒の現代社会に対する責任意識（Rabbi Professor Irving Greenberg）

アメリカ合衆国でユダヤ教の代表的指導者の一人として活躍しているラビ・グリーンベルク教授は、“Center for Jewish Learning and Leadership”の長官であるが、現代社会に対してユダヤ教徒がどのような責任と意識をもっているかについて以下のような講演をされ、キリスト教とユダヤ教の深い絆と共通の使命を理解する大いなる助けとなった。最初に「あなたたちはわたしの証人である」というイザヤ書43：10¹³を引用し、イスラエルの民が神のしもべであり、愛深い神と神の人類と宇宙に対する神秘的な計画の証人となるように選ばれたこと、また「イスラエルの民」とは単にイスラエル民族、ユダヤ人だけを指すのではなく、アブラハムと契約を結ばれた神を信じるすべての人を含む用語であり、そのことを自分は現代世界の中で学びつつあると述べる。

「証人」について最初に定義する。重要な事柄が議論され、一つの出来事についてさまざまな解釈や意見がある。基礎的な事実が、多くの人々にとって自明ではない。そのような問題の中に以下のような問いがあろう。神はあるのか、ないのか。この世界は背後に意味と目的をもった秩序と価値ある世界なのか、否か。人類はより高い権威ある存在に対して責任を果たすべき仕事をもっているのか、否か。このように決定的な証明ができないとき、それに関して自分が見たことや経験を語る「証人」が意味をもつ。その証言は証人の真実さ、首尾一貫性とその人の生き方そのもので増幅される。証言は公明正大に疑い深い批判的な聴衆の前で行われ、十分な納得性、力強さ、真実さが認められれば、そのことは次第に法や統治者の同意によって事実として確定されていく。それは社会の未来を築く基礎ともなるのである。

イスラエルの民は、神¹⁴のみ前で、人類に対して証言をするために、「創造」、「契約」、「メシア（救い主）」についての三つの物語¹⁵を語り継いでいる。これらはイスラエルの民の経験と伝承から描かれたもので、「創造物語」は世界が神によって意図された完成に向かうものであることを示す。「契約物語」は不完全な世界が神とのパートナーシップによって完成に導かれるプロセスを描き、「メシア物語または終末の日の物語」はそのプロセスの頂点を語る。最後すべてが完成されるが、それは人と人、人類とすべての生き物、すべての生物と自然、万物と神との間に平和である。この三つの物語に加えられる一つの中心的物語¹⁶は「命の勝利」である。命は量的にも質的にも増大し、完成する。命は世界の中で完全に開花し、互いに調和をもって存在し、命の源である神との深いかわりに生かし続けられる。

1) 創造物語

これはユダヤ教徒とキリスト教徒が一致して語る物語である。創造物語は、世界を表面的な出来事や人間の限界ある視界からだけ判断するのではなく、宇宙的な視野から存在を見るように導いてくれる。世界存在には三つの大きな動きがある。第一に世界は混沌から秩序へと動いている。第二に世界は命のないものから命あるものへと動いている。生命は個人的な感覚には脆い、はかないものと映るかもしれないが、肝心なことは「隠れた、無限の生命の源」があるということである。その命は無限の善性（愛）と無限の力をもってあらゆる生命を支えている。それは創造物語の鍵である。この「隠れた無限の力」を我々は「神」と呼んでいる。この無限の力が人間を神の心へ、人類の歴史をその目的へと引き寄せている。第三に命はその源である神にますます似るものとなる。命は低い存在の段階から神に似るものへと動いていき、人間の形になって、その命は『創世記』1：27¹⁷にあるように、神の似姿と呼ばれるほどに創造主に似通ったものになる。

神の似姿である人間の出現は宇宙の歴史の転換点である。今日まで命は果実をもたら

し、繁殖するものとして織り成されてきた。神の意識に象られた人間は神によく似ているので、自分自身がその一部である命のパターンを把握することができる。神の愛に象られた人間は神によく似ているので、自分の仲間である被造物と、万物の創造者とその美しい計画を愛することができる。イスラエルの民は、人間が神の似姿によって創造され、無限の価値・平等性・独自性という代替することのできない尊厳を創造主によって与えられたということを自明の真理として捉えた¹⁸。人間同士は似ている。神の似姿は一つのモデル（アダムとエフ）から造られたが、それにもかかわらず、一人一人は独自、ユニークな存在である。人間のユニークさは神の手の業のしるしであるとタルムードは言う。

Imitatio Dei、神に倣う、ということは宗教の中心的道である。貧困、飢え、抑圧、戦争、病気、死は神の似姿に相反することであり、克服されるべきである。創造の証人であるユダヤ教徒もキリスト教徒も、すべての人が死ではなく、命を選ぶように促している。どれほど長く不公平、抑圧、無力な状態が続いても、この世界がよい方へ向かっているというヴィジョンを失ってはならない。世界の完成へのプロセスを告げるために「契約物語」を語る。

2) 契約物語

契約物語の中心は、この世界を完成するプロセスに人類をパートナーシップとして召還されたということである。人間に対して神は尊敬と愛を抱いているので、人間が自由意志をもってこれに参加できるように、完全で対等なパートナーシップがとれるように導かれる。神はしばしば完成させてしまうと、人間に自由であることを強制する誘惑に駆られるが、これに抵抗しなければならない。現実の歴史において苦痛はあまりにもひどいので、神も人間もともに終わりの完成が来るように強いる方向に揺らぐ。しかし、契約を履行する神と人との共同作業が成功するために忍耐することが大切である。

契約とは、世界を完成させるために以下のようなことに従わない選択である。奇跡による解決願望、神秘の次元に逃避する宗教、未来の世界への逃避、古い体制を完全に破壊して新しい世界をもたらそうとする革命など。これらはどれも契約による新しい世界へのプロセスの一面にすぎず、ユダヤ教にもキリスト教の歴史にも姿を現してきたが、契約はこの一つ一つを否定する。

契約は、創造の完成に奉仕するものである。命の力と死の力との間に宇宙的な葛藤がある。どのような行動もこの葛藤に対して中立ではありえない。人類は命の側に立って行動するように求められている。契約の第一は「命を選べ」である¹⁹。悪とは死を選ぶことである。ユダヤ教では、契約が日常生活の行動の基準となり、掟と律法に表現される。すべての儀礼は契約の記念であり、我々を命の選択と契約のパートナーとしての神に向かわせる。キリスト教では、一般に、命と信仰という方向が神学的に強調され、特定の行動はそ

れほど強調されない。キリスト教の中でも、カトリックは独特な典範が作り出されてきた。ユダヤ教、キリスト教のいずれにおいても共通するのは、命が死に対して勝利を治めるという約束への信仰であり、この約束の究極的成就是死者の復活である。

我々は不完全な世界に生きており、人間は限界がありはかない者であるから、すべての行為が純粹に命あるいは死を選択するものではない。しばしば善と悪が混合し、自由意志による行動も明瞭ではなく、あいまいである。しかし、契約という原則は、あらゆる状況において、命を選択するためのなおよりよい道があることを示す。世界を変革するためのガイドラインは、善を最大限行い、契約による道の一つ一つ具体化していくことにある。契約による世界完成のプロセスはある種の方法論を前提としている。

a) 人間が苦しみ、悪に汚れ、現実生活が破壊されようとするそのとき、契約によるプロセスは始まる。「彼がわたしを呼び求めるとき、彼に答え、苦難の襲うとき、彼と共にいて助け、彼に名誉を与えよう」（詩篇91：15）とあるように、神は助けの手をのばし、人はそれに応じなければならない。

b) 契約の民はアバンギャルド（前衛芸術家連）のようであり、最終の完成に向かって強烈に前進する。彼らは傲慢と自己満足に陥り道はずれることもあった。しかしその生き方は全人類に対するパラダイムであり、人はこの民の失敗・弱さからも学ぶことができる。

c) 人間の感情は尊敬され、頼りにされるべきである。人々は異なったルーツ、言語、記憶、関係をもっている。共同体はそれぞれの必要性、生活、生活様式をもっている。成長発展へのプロセスは具体的な感情を肯定することから始まる。身近な愛する人々の中に神を見出すように促し、そうして次第に全世界を抱擁できるように心が広がる。人類完成のために、自分の家族や具体的なものへの愛情を拒絶することは、愛を根絶やしにする危険へ導き、人々を非人間的にする。ユダヤ教徒とキリスト教徒は、具体的なものと普遍的なものへの愛のバランスにおける相対的重さと危険性という点で差異がある。ユダヤ教は家族を大事にするが、これはときとして同族・種族意識に閉鎖し沈みがちである。キリスト教は全人類へと殻を破ることを求めるが、この理想はしばしば自分の関心を拡大する帝国主義者の協議事項に終わる。ここで再び、どちらも自分の立場に固執せず、他者の洞察を忌み嫌わないことが肝心であろう。それぞれの伝統の中にも多元的要素があり、ユダヤ教・キリスト教双方の信仰に共通する大きな流れを覆い隠さないことが大切だ。

d) 人間的な足取りが世界を完成する速度である。諸悪は世紀を超えて生きてきた。よりよい方向への変化も歴史の各ステージで行われてきた。倫理的、霊的な突破口があらわれ、長足の進歩があったが、それに続いて墮落と逆戻りもあり、人々が変化を自分のものとして受け入れ、彼らの真の限界に向き合うとき、歩みは堅固になる。

e) 契約による目標は一人の人の生きている間に達成されるものではない。使命は世代から世代へと受け継がなければならない。そうしなければそれは途中で終わり、死に絶える。したがって、契約は世代間でのパートナーシップでもある。契約の価値を伝達し、記憶するために子供たちを教育し、共同体を形成する必要がある。伝達を達成するために、共同体は制度、実践範囲²⁰、幹部となるリーダー、さまざまな典礼が必要である。これらは人間的なものを表現し、養いの力となるが、またしばしば共同体のエネルギーを誤った方向に導くこともある。

f) さまざまな限界は人間の眼で見れば必要悪であるが、しかし、神の側から見れば、「限界は命と自由を豊かに育てる」という命題が成り立つ。限界なしに命は存在しない。人間は直接、神を見ることはできない²¹。したがって神の無限の力と無限の善性でさえ、それがあからさまに現れるとき、その勢力は創造界を圧倒し、すべての命を破壊してしまう。なぜ無限に完全な神は契約のうちにさまざまな限界を受け入れるのか、という疑問への回答はここにある。神のうちに包含された自己限定と自然の秩序は人間に存在と尊厳を与えるからである。限界なしに命を選ぶことは、命を絶対化することにつながり、命の力が支配をふるって、突如、死を生み出すこととなる。人は命を得るために、命を失う準備をしなければならない。その限界が命を救うのである。

ユダヤ教の伝統は、命を救うためにはあらゆる掟を乗り越える（無効にする）ことができると主張する。ただ、殺人と偶像礼拝とある種の性的不道德だけは例外である。自分の命を救うために殺人をすることは、命そのものの基盤と尊敬に穴を開けることである。それは死を選択することになる。自分の命を捧げることによってのみ、人は世界のために命を増大させることができる。偶像礼拝は死に組することである。自分の有限な命を救うために、自分が追求している限界あるものを絶対化し、真の命を与える無限なものから人間性を遠ざけることになる。神は命のために自身を限定する。人間は一層神に似たものとなるために、与えられた意識を深め、諸能力、関係する力、自由意志を強めて、豊かに成長するよう求められている。しかし、何の限界も置かずに、この成長のプロセスを進めることは、人を偽り者とする。真に神に似たものとなるために、限界を受け入れる必要がある。契約の民の証しは二重のメッセージを伝達する。命を選べ、しかし、この成長のプロセスにある限界を受け入れよ。神のようになることは、あなたの限界を受け入れることである。

契約物語に関するユダヤ教とキリスト教の相違

創造物語とは異なって、契約物語に関してはユダヤ教とキリスト教との間に深刻で、根

本的な相違がある。契約の中に、全人類がパートナーシップとして肯定され、そのプロセスに導入されるということは本質的なことである。人間をパートナーとして肯定するにあたって、神は人間の過ち、ゆがみをも受容する。何らかの善の破壊でさえ、目標が達成されるための代償として、受け入れる。したがって、過ちと、後悔と矯正のメカニズムが契約システムの中に組み込まれている。

ユダヤ教とキリスト教の相違は、何が悪かったのかを説明するところから始まる。なぜ祝福された創造界と、我々が住む壊れた、しばしば呪われた世界との間に溝ができたのか？ 聖書神学、神秘主義、哲学は異なるさまざまな説明をしている。歴史的にみて、契約が継続する物語の伝達はユダヤ教とキリスト教では非常に異なっている。契約は神的なものが歴史の中にパートナーとして介入することを表すので、その表現は文化の相違にしたがって異なってくる。異なる状況における定期的な契約更新は、民を支え、過去との継続性を保証した。衰退したとき、特別な危機状況においては、特に更新の宣言が民に文化と契約を新たにもたらし、新たな世界を開いてきた。

ユダヤ教とキリスト教はアブラハムとその子孫にされた契約を根本とする点では一致している。両者ともシナイ契約の正真性と権威を認める。それは「アブラハムの道」²²を「イスラエルの民の道」へと拡大変容した。しかし、一世紀にイエスに従う者がヘレニズム世界と出会う中で、またローマ帝国との葛藤の中で、ユダヤ民族の中に「ユダヤ人キリスト教世界」が生まれた。それはユダヤ人社会が大破局を迎え、無力となって世界に離散する直前であった。ユダヤ教にとって、その後の二、三世紀は契約更新のときとなり、「ラビ的ユダヤ教」が開花した。ラビらは神が自己限定をし、ローマ人が人間的決定をすることを許容した。神は神殿破壊を許し、イスラエルの民を契約にもっと責任あるパートナーとして呼ぶために、身を隠された。隠れた神は臨在していた。実際、その「シェキナー（住まい）」は²³いたるところにあるが、その現存は「発見」されなければならなかった。預言者と違って、ラビは「主はこう語られる」とは言わない。彼らは過去の記録をもとにして、何を神はのぞまれるかについて彼らの判断を述べる。彼らは人々があらゆるところに神の現存を見出し、聖なることを実行できるように教育する。ラビはいつかの世から世俗的なものが一掃され、地上に宗教的支配が確立し、イスラエルが過去の栄光を回復する贖いのときを待つように忍耐を教える。キリスト教が勢力をもち、ユダヤ人を迫害するようになるにつれ、ユダヤ教にとって、倫理はいつそう緊急で中心的なものとなる。

キリスト教徒はイエスのカリスマによって満足し、イエスの話を繰り返し語り、約束のメシア（救い主）が彼らの間に到来したと確信する。救いは今すでに与えられていると信じる。しかし、神の国の到来についての宣言と現実が続く抑圧、苦しみ、死などのコント

ラストは、キリスト教徒にこの世が完成されるという約束を現世的な肉による約束²⁴としては考えない誘惑を与えた。歴史をマモン（現世の王、悪魔）に引き渡すことと、純粹に神に仕えることをやめることとの間に大差がなくなる。キリスト教徒は揺れ動き、魂と体の両方が救われる第二の救い主の到来（再臨）を期待することになる。キリスト教の主流は、契約の目的を達するために、神が人となられたことを確信している。イエスへの信仰は契約をすべての人類に開放している。

ユダヤ教は現実世界に悪が続いていることを決定的な理由として、メシアがすでに到来したことを否定する。キリスト教はユダヤ教が肉的なものにとどまっている²⁵ためにメシアを見失っていると言い、キリスト教の勢力を用いて、ユダヤ教の反論を黙らせ、ユダヤ人に強情さの報いを払わせようとする。ユダヤ人にとってはメシアがまだ到来していないことの唯一の証拠は、いまなお増大する苦しみである。

ユダヤ教は神が人となること（受肉）を、絶対に認めることができない。そのような神の行為は必要ではない。神の現存は隠れたものである。イエスのような眼に見える神の現存、神殿のようなものは必要ではないし、ふさわしくない。キリスト教徒は神がイエスにおいて決定的な介入をしたという教えを正しいと考えている。彼らにとって全歴史はこの準備であった。ユダヤ人は頑固で盲目である。そのためにユダヤ人は神の現存から見捨てられた。「はじめの者が後になる」²⁶というように。キリスト教はユダヤ教の土台に基礎を置いているので、ユダヤ人が存続することは信仰に対する生きた矛盾になる。この矛盾を取り除くために、ユダヤ人を改宗させたり、追放したり、殺したりする政策がとられた。しかし追放は殺人の一部である²⁷。ユダヤ教側からは、ユダヤ人の生命のしるしは強靱であり、これまで以上に神の現存は近くに感じられ、キリスト教は間違ったメシアに従従する偶像礼拝者であるという確信を深めていった。

両者は容赦のない敵意に縛られていた。近代における抑圧と苦しみに対する人間革命は、世俗主義の巨大な成長と、宗教の拒絶を招き入れた。ユダヤ教とキリスト教はこの近代革命に対する土台を失い、契約を成就することを求めた。双方の宗教は現代文化の学問的な累積的重みによって歴史の源泉に帰ることを強いられ、歴史を超越した真理の土台を掘り下げるようになった。ユダヤ教とキリスト教双方はそれぞれの歴史に直面し、互いの関係を見直すことを余儀なくされた。特に自由主義と民主主義の名においてとった彼らの行為を道徳的批判の目にさらした。現代性へ抵抗した後に、両宗教は次第に新しい世界からのチャレンジと自分たちを道徳的、文化的に浄化するチャレンジを受け入れ始めた。このことが本大会のテーマともなっている。ユダヤ教とキリスト教は世俗化時代にどのように宗教的リーダーシップをとることができるか？

このチャレンジに対する第一の答えは、ユダヤ教とキリスト教が何を試みるにせよ、共

に働かなければならないということである。双方の道徳的、文化的信憑性は、相互の憎悪という遺産を克服することにかかっている。双方とも世俗主義に飲み込まれる脅威にさらされている。少なくとも、互いに尊敬する能力を確立し、現代社会から誉めるに値するとみなされる文化の水準を維持する努力をしなければならない。双方の相違と葛藤が何であれ、西欧の大半を占める世俗主義的視野に対して同じ観点から互いに光を当てていくべきである。最も重要なことは、我々は今、ショアー（絶滅）の後を生きているという事実である。ホロコーストはキリスト教徒に自己批判を引き起こさせ、ユダヤ人を軽蔑する教えの伝統を克服する神学的決定をさせた。これは命と生命力の癒しのしるしである。キリスト教誕生についても一つの読み方を着想できる。ユダヤ教とキリスト教は母と娘の関係にあるのだ。

贖いと契約の道についてのヴィジョンを人間のグループに広くもたらすのは、常に神の計画である。アブラハムの幹からでた芽が異邦人（諸国民）という木に接木されることは神の計画であった。そのようにして諸国民は神に根ざし、彼らの樹木に契約の実をむすぶことができるようになる。大多数のユダヤ人にとって契約の刷新に呼ばれていると感じるのは、より積極的に一層隠れたパートナーとの関係に生きることである。目に見える神殿を目指す、秘蹟的なものは最も不適當である。しかし、ユダヤ人の場合と違って、異邦人が契約の最初のステップに入るためには、そのようなアプローチが必要とされ、奇跡や公然と目に見える相互作用が適當であった。

ラビ・グリーンベルク教授の講演をほぼ3分の二程度まで順を追って紹介してきたが、この後は、ごく簡単にユダヤ教とキリスト教対話に重要な要点だけをあげておきたい。

祈りに関して、大切なことは神のみ旨が行われることを願うことだ。神の愛は大きく、一つの民の贖いだけでその力を使い果たしてしまうことはない。何度も繰り返して、諸国の民に呼びかけ、選ぶ愛がある。神の親としての愛は大きく、最初に生まれたものも次に生まれたものも同じ無限の愛で愛することができる。

最も悲しいことは愛の福音の中に、イエスの家族（すなわちユダヤ人）を十字架刑に処する行為が続いていることだ。それは恐ろしい大量虐殺にまで発展している。最も悲しいことはユダヤ教を部族主義、律法主義、禁欲主義、この世の否定と定義してしまう勢力だ。契約の民は他のどの民族とも同様に人間的であり、また腐敗勢力のもとに服している。

今は痛悔と悔い改めのときである。ユダヤ教、キリスト教双方の関係を建て直し、他者を貶める内部にある考えを克服するときだ。双方とも神の民としての新たな同盟をし、人類と世界の完成のために協力しなければならない。行動は人々の中に共に働くよう反応を呼び起こす。愛の力、神からの靈感、倫理的浄化は二千年間にわたる相互の憎しみを克服

するために必要である。そして葛藤そのものは新たな信頼をもたらすものとなり、それぞれの宗教的共同体独自の証しを有効にするだろう。

飢餓、貧困、抑圧、戦争、病気、死は現代世界の中でかつてない悲劇をもたらしている。「神の国」の夢は破れている。神の似姿に創造された人間の根本的尊厳はどうなっているのか。女性と男性の同等性は、いまなお、はるかに遠い現実である。しかし情報の発達と自由観の広がりによって、他者の独自性と他者との平等性樹立のための運動は過去の歴史を徐々に変えている。人間関係、意識、自由、命の尊厳の領域では、神の似姿としての人間はかつてないほど発展し、実現され、輝いているといえる。人間開発の促進によって人は真に神のパートナーとして創造界のために働く能力を身につけてきている。不治の病の治療が進んだことも、命の勝利への道である。

このような人間の能力開発と解放が、なぜ神から独立した人間の勝利であるとか、あるいは伝統的価値と対立するものとされているのか？ 一つには我々が自分たちの「物語」を語らないからである。我々は自分のよりどころを忘れている。我々は自分たちが何にたずさわってしようと、事実教師であり、物語を語る者であることを忘れている。我々は、自分たちの物語の宇宙的次元を再び述べる必要がある。それは我々の祈り、瞑想、典礼の重要な要素ではないか。我々は地方的な文化から離脱して、ユートピアに、永遠の贖いという夢に身をおくべきだ。それこそ安息日（サバド）、安息年（サバティカル・イヤー）が意味するところである。我々は人間の苦痛を共に耐え忍ぶ神の現存という慰めのメッセージを伝えるべきである。契約によって、我々には変えられることのない賜物、祝福が与えられていることを忘れてはならない。神が貧しい者を特別の愛をもって配慮しておられることを我々は忘れていたのではないか。それは貧困がずっと続いてよいという話ではないのだ。

我々は聖なるものを特定の場所に閉じ込めずに、大通りに、工場に、病院になどなど、生活のあらゆる領域にもたらさなければならない。あらゆる場で聖なるものを引き出すことができるように人々を教育し、そのための力を養わなければならない。敵は現代世界ではない。むしろ我々の思想が分裂し、分極化していることだ。命、喜び、楽しみを否定して聖なるものをもたらそうとする宗教界内部での混乱がある。

我々は宗教が伝統となることを認めてきたが、契約を想起して、自分たちの使命から命を選択するということに責任を充分果たしてこなかった。

長い世紀にわたって、同性愛者はホモ、ゲイと呼ばれてきたが、今、情報メディアの力によって、彼らのもつ神の似姿が取り上げられるようになった。レズビアンやゲイ独特の苦しみや他とは異なる顔がみとめられる時代である。なぜ我々は他者の独自性が発見されることに衝撃を受けるのか？ 我々の歴史は他者の中に神の似姿を見出すとき、神の現存

に近づくということを主張してきたのではないか。他者を貶め、決まりきった価値体系を押し付けてきたことのペナルティを払うときがきている。我々は他者のユニークさと尊厳の前に自分自身をさらけ出すまでは、「人間的なものは何一つ神に疎遠ではない」という証をたてることはできない。

我々は教えるという使命をもっているが、教えるというプロセスで、我々は学ばなければならない。語るというプロセスで、聞かなければならない。宗教は一つの調べではありえない。教える、ということへの恐れに対して、三つの提言をしたい。

第一に、「恐れるな、わたしはあなたと共にいる」という預言者のことばを告げよう。五千年、いや五万年の人類の経験は、人生にとって根本的なことは「息」と同様に「意味がある」ということを教える。意味の探求は食物を求めることよりもさらに重要である。家庭は個人が成長するために基礎的な手段である。これは何度も作り直されてきた。現代は一層人間的に、平等に、よりよく再生されるであろう。人間の現実が神的な土台に植えられているという創造主への信仰がこれと結ばれている。

第二に、多元主義を理解することだ。我々はまだ神の契約の多元的豊かさを理解していない。多元主義は他者を受容し、肯定すること以上の意味をもつ。それは、他者の存在を祝福することが自分の置かれている場の均衡を保つことだ、と認識することである。たとえば我々の中で自分は正しい位置にいても、我々の立場と異なる他者の存在は我々を矯正し、あるいは過度になることに対して危険度を示してくれる。多元主義は神の愛の現れの多様性とユニークさを語る。それは対話がどれほど重要かを教える。

第三に、自由の約束に関する一つの点を述べたい。神は人間の自由を大切にするために、アダムとエワに死を与えなかった。契約そのものは人間の自由を前提とする。我々の時代は自由、力、豊かさが爆発的に成長する時代である。その中で我々は生死を決定するようにチャレンジされている。各時代に特有の使命があるが、今の時代にあって、我々はどうのように死ぬかよりもどのように生きるかを選ばなければならない。自分の無力さをもってどのように神に仕えるかよりも自分の力をもってどのように神に仕えるかを選ばなければならない。新たな状況は新たな祈りを必要とする。

わたしの最大の可能性が最悪の可能性を克服しますように。神の似姿を他者の中にも自分の中にも見出して、神を、そして互いを愛するにふさわしい者とされますように。そのようになって我々の証言が聞かれますように。他者の中に無限の価値と独自性と平等性を見出して、我々自身の価値、独自性が引き出されますように。各人が無限の、愛する神である創造主を想起するしるしとなりますように。

ラビ・グリーンベルクの講演にあった率直な問題点および提案は、ユダヤ教とキリスト

教対話の困難と同時に必要性を示すものであり、筆者には忘れがたい大きな希望と光の源となり、キリスト教徒としての実際のおよび神学的課題をずっしりと与えてくれた。

(次回に続く)

-
- ¹ “CATECHISM OF THE CATHOLIC CHURCH” An Image Book Doubleday, New York, London, Toronto, Sydney, Auckland 1994、『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会 2002年7月
- ² 『マタイ』2：2「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みにきたのです」。イエスを最初に礼拝に来た人が外国人であることをマタイは重視する。
- ³ イエスの誕生を祝うクリスマスの後に教会はこの出来事を「公現」として祝う。ギリシア語のエピファニアの訳語であるが、イエスが公に人々の前に現されたことを意味する。
- ⁴ 「神の民」は聖書を一貫して流れるテーマで、その形成は歴史的には出エジプトの出来事に始まる。
- ⁵ イザヤ書の第3部、通常イザヤ56－66章をさす。
- ⁶ 「わたしには彼が見える。しかし、間近にはない。ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの尺がイスラエルから立ち上がり・・・」で、ヤコブの子孫からイスラエルを治める者があらわれるという預言。
- ⁷ 「王笏はユダから離れず、統治の杖は足の間から離れない。ついにシロが来て、諸国の民は彼に従う」
- ⁸ 十字架は避けられない必然的成り行きという考え方はよく見られる。特に原理主義的な見方には多い。
- ⁹ 奥村一郎著『祈りの心—愛の息吹』海竜社 2001年 11－13頁
- ¹⁰ 英語で話された原語では“inner problems”
- ¹¹ 英語では“outer problems”
- ¹² 英語では“transcendent problems or transcendent question”
- ¹³ 『イザヤ』43：10「わたしの証人はあなたたち、わたしが選んだわたしの僕だ、と主は言われる。あなたたちはわたしを知り、信じ、理解するであろう、わたしこそ主、わたしの前に神は造られず、わたしの後にも存在しないことを」（新共同訳）。
- ¹⁴ Greenbergは英語の講演の中で「神」を“Loving God”と言っているが、翻訳しにくいので、「神」または「愛する神」としたが、英語には神との親しいかわりが表現されている。
- ¹⁵ 「物語」は英語・ドイツ語では「歴史」と語源的に関連がある。Story→history、Geschichte（歴史・物語）。日本語の「物語」は語源的には「もの」のもつ意味から「人智を超えた、超自然の存在にまつわる話」であった。特に宗教伝承にまつわる物語は単なる「作り話」として学問領域から排除することはできない。
- ¹⁶ One master story
- ¹⁷ 「神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」
- ¹⁸ タルムード、「サンヘドリン」37a参照
- ¹⁹ 『申命記』30：15、19「見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く」「わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るように」
- ²⁰ boundary practices
- ²¹ 『出エジプト記』33：20「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできない」

- ²² 『創世記』18：19「わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うように命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである」
- ²³ 「シェキナー」は「住む者」「住まい」をあらわすヘブライ語で、後期ユダヤ教文学において神のヌミノゼ的現存、遍在を示す概念。この語は旧約聖書では用いられていない。
- ²⁴ 新約聖書の中では特に、パウロとヨハネがこの論議をもちこむ。『ローマの信徒への手紙』9：8「すなわち、肉による子供が神の子孫なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫とみなされるのです」参照。
- ²⁵ たとえば、『コリントの信徒への第二の手紙』3：14-15「彼らの考えは鈍くなってしまいました。今日にいたるまで、古い契約が読まれる際に、この覆いは除かれずにかかったままなのです・それはキリストにおいて取り除かれるものだからです。このため今日にいたるまでモーセの書が読まれるときは、いつでも彼らのところには覆いがかかっています」
- ²⁶ 『マタイ』19：30、20：16など。
- ²⁷ 『創世記』37：26-35参照。

本稿は、1994年2月1日-4日、エルサレムで開催された“The International Jewish/ Christian Conference on Modern Social and Scientific Challenges”の参加者に会場で配布された講演者の草稿および筆者のメモを資料としている。